



木田市長の

ど〜んと

真珠のように輝く
まちづくりのために

コミュニケーション

vol.51

「森も里も海も」
みんなつながっている

先日、かもめホールにおいて、「森里海連環―神々のふるさとにて」というシンポジウムが鳥羽磯部漁協主催で開催されました。

これは、森も里も海もお互いに関連していて、それぞれの環境を良くするには、独自の取り組みだけでは解決できないという考えの下、行われたものです。

最近、「森は海の恋人」という言葉が聞かれます。海を守るために森に木を植える行事も行われるようになりました。自然林と人工林が混在する中で、自然林が海の環境のためには最も良いと思います。

しかし、日本の国においては、人工林が広大な面積を占めており、その存在を無視することはできません。今から50〜60年前、植林さ

えしておけば、将来は必ずも

うかるとばかりに全国各地でヒノキや杉の人工林がつくられました。ところが今や、輸入品に押され、植林の手入れどころか、伐採して売つても採算が取れないという状態で、人工林はそのまま放置されているような状態です。

今、人工林は密植され、単一の種類の木に覆われ、下草は一切生えていません。

このことは、大雨による被害を増大し、森に生息する動物たちをも苦しい状況に追い込んでいます。

間伐を強度に行つて、光が地面まで届くようにし、ほかの草木が生えるようになる

と、生産される木も良質となり、災害に強い森となります。さらには、海に対する好影響も期待できるのではないで

しょうか。

このような森の手入れをしつかりしてもらうためには、林業として成り立つよう採算が取れなくてはなりません。

日本の国は、工業製品の輸出を確保するために、国内で十分生産できる米や材木まで、安い輸入品と競争させることにより衰退させてきたと思います。

特に材木については、伐採してしまうと熱帯林などは再生しないということを理由にして、輸入を制限することで国内産の材木を優先して使用すべきではないかと思えます。

最近の建築家屋に占める材木の割合は、減少してきており、国産材を使用することの価格への影響は、小さいものと思われま

す。国産材を使うことで、林業が復活し、また花粉症に悪い種類の木を順次減らし、森の環境を改善することができ

るのではないのでしょうか。それが海の環境改善や持続可能な漁業に結びつけることができれば、良いことばかりのようにわたしは思うのですが、みなさんはいかが考えられるのでしょうか。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.89

人権・意識・脳細胞(2)

今回は、人権意識と密接な関係がある脳細胞についてのお話です。

川島隆太さん(東北大学教授)は、その著書『自分の脳を自分で育てる』の中で、「神経細胞の数は、だいたい千数百億個もあって、神経細胞の一つ一つからは、いくつもの神経線維が出ています。

この神経線維は、神経細胞からの情報を運ぶ「生きた電線」です。この電線が複雑に組み合わさって、脳のネットワークをつくっています。実は、脳の働きとは、神経線維という電線でつながった、た

くさんの神経細胞の働きなのです。

実際、みなさんの脳の神経線維には、神経細胞から発生した弱い電気が流れています。

そして、神経線維から流れてきた電流が、次の神経細胞に伝わる場所をシナプスといいます。ここでは、次の神経細胞に、直接電流が流れていくわけではありません。神経伝達物質とよばれる、さまざまな化学物質の力を借りて、電流の情報を伝えます。」と言っています。

さらに、「何度も何度も学習をして、脳を活発に働かせることによって、細胞と細胞の間に情報を流すいちばん近い道筋ができる」、「さらに学習を繰り返すことで、道筋が太くてしっかりした高速道路になる」、「脳の細胞と細胞をつなぐ高速道路をたくさん作る」ことが、よい脳をつくることになる」とも、言っています。

人権意識を少しでも高めるために、いろいろなことを積極的に学習し、繰り返し実践したいと思えます。

